

「ばれいしょ原原種の生産農場」 の連載に当たって

一般財団法人いも類振興会 理事長

かりや あきお
狩谷 昭男

健全無病な優良種苗の供給を目的に馬鈴薯原原種農場が発足したのは、1947年である。馬鈴薯原原種農場は、全国に7か所(北海道の北海道中央、後志、胆振、十勝、青森県の上北、群馬県の嬬恋、長野県の八岳)設置された。1964年には、二期作用の農場として長崎県の雲仙が加わり、計8か所となる。馬鈴薯原原種農場で生産された原原種を都道府県の実種圃に供給し、そこで生産された原原種を採種圃で増産するという採種体系を新たに確立していった。

日本では1938年以降、実種圃、採種圃設置による馬鈴薯採種体系を整備してきたが、特にウイルス病と輪腐病は、選別、消毒ではこれらを防ぎきれず無病健全な種いもの供給以外に排除の方法はないことが判明していた。戦後、農林省ではこの欠陥について対策を検討中のところ、連合国軍総司令部(GHQ)の要員として滞日中のワルデー氏らからの勧奨などもあり、馬鈴薯原原種農場の設置が予想外の早さで実現した。その背景にはGHQにとって、食習慣などから生鮮野菜や馬鈴薯に関心が極めて高かったことが幸いしたと言えよう。

馬鈴薯原原種農場を頂点とする三段階採種体系の確立によって、その後10a当たり収量の増大などを通じ、馬鈴薯の増産・安定供給に多大な役割を果たしてきた。

1986年12月1日には、馬鈴薯原原種農場を核とする種苗管理センターが新たに誕生した。これによって、馬鈴薯原原種農場という固有名詞はなくなった。この間、いも類振興情報No.4(1985年)～No.12(1987年)において、8つの農場の歴史、風土、事業内容、業績等に関する寄稿をいただいた。この農場めぐりの原稿を『清薯源流の砦』と題して編集し、1987年に、財団法人いも類振興会から出版している。『清薯源流の砦』の文字は、農林省農産課のOBであった大山謙吉氏が八岳馬鈴薯原原種農場に建てた記念碑に記された碑文である。「清薯源流」は健全無病な馬鈴薯の原原種を、「砦」は病虫害から守る砦としての原原種農場を表している。この『清薯源流の砦』の記録は、とりもなおさず馬鈴薯原原種農場40年の軌跡と言える。

それから更に30年が経過し来年で、ばれいしょ原原種の生産農場として70周年を迎える。ばれいしょをめぐる状況も、この間大きく変化した。そこで、ばれいしょ原原種の生産、供給状況と課題を再整理し、将来の在るべきばれいしょ原原種の生産農場の姿を求めて、連載を企画した。これからの2年間にわたる「ばれいしょ原原種の生産農場」めぐりを、旅する気分で学び楽しんでいただければ幸いである。